様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：１４７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ００５７０

研究課題名（和文）分離素性継承の実証的・理論的研究

研究課題名（英文）EEmpirical and Theoretical Research on Split Feature Inheritance

研究代表者
松山　哲也（Matsuyama, Tetsuya）

和歌山大学・教育学部・教授

研究者番号：９０３１５７３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、Citko et al (2018)が提唱する分離素性継承を裏付ける証拠を英語の構文から補強し、分離素性継承のメカニズムを精緻化することであった。Chomsky (2013)のラベル付け計算法(Labeling Algorithm)に違反するような統語現象が分離素性継承を用いることで首尾一貫した説明が可能であることを示すことであった。この目的を果たすために、筆者は、英語の非規範的主語構文（主語接触関係節構文、because節主語構文、指定的疑似分裂文）に着目した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、一見Chomsky (2013)のラベル付け計算法に違反するような現象が分離素性継承を組み入れれば首尾一貫した説明が可能であることを示すことである。期間全体を通じて、英語の非規範的主語構文（主語接触関係節構文、because節主語構文、指定的疑似分裂文）の分析に一貫して取り組んだが、各構文の特異性は、分離素性継承を援用するだけでは説明するのが難しく、当初の研究目的をラベル付け理論内で微修正しながら研究を進めることになった。その意味では、本研究は、分離素性継承よりはラベル付け理論に貢献したと考えられる。

研究成果の概要（英文）：Our study aimed to provide empirical evidence for split feature inheritance, which has been advanced by Citko (2018) contrary to the view that feature inheritance is obligatory. To achieve this, we turned our focus on non-canonical subject constructions such as subject contact relative clause constructions (e.g., There is a man lives in Paris.), subject-because constructions (e.g., just because I am here doesn’t mean that I didn’t go.), and specificational pseudo-cleft constructions (e.g., What John saw in the mirror was himself. ). One of the findings of our study has been presented in English Linguistics 38, p.33－73 under the title “Analysis of Subject Contact Relative Constructions Based on Spilt Feature Inheritance”

研究分野：英語学

キーワード：分離素性継承　ラベル付け計算法　主語接触関係節

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

## １．研究開始当初の背景

Chomsky （2008）以来、位相主要部からの素性継承がどのように行われるのかが多くの研究者の関心を集めてきた。Richards （2007）は、素性付値と転送が同時に行われるという条件から、位相主要部にある素性はすべて非位相主要部に継承されることを主張している。一方、Cikto et al （2018）は、位相主要部の素性の一部が残留する「分離素性継承」を提案している。ただ、Cikto et al （2018）は、分離素性継承の経験的基盤をロシア語やポーランドの与格主語構文に見出したが、英語からの証拠が提供されていなかった。

## ２．研究の目的

本研究の目的は、分離素性継承を裏付ける証拠を英語の構文から補強し、分離素性継承のメカニズムを精緻化する。具体的には、一見 Chomsky （2013）のラベル付け計算法に違反するような非規範的主語構文が分離素性継承を組み入れれば首尾一貫した説明が可能であることを示すことである。上記の目的を果たす上で、筆者は、下記の（1）の主語接触関係節（Subject Contact Relatives)、（2）の because 節主語構文、（3）の指定的疑似分裂文に着目した。

（1） There is a man lives in the country.
（2） Just because I am here doesn’t mean that I didn’t go.
（3） What John saw in the mirror was himself.

## ３．研究の方法

本研究は、理論的な考察と言語事実との間を常に行き来し、理論偏重に陥ることなく各構文の分析を行った。具体的には、（4）の点に留意して研究を進めた。

（4）a. コーパスからの実例と英語母語話者の内省をうまく組み合わせて、より詳細な記述を行う。
b. （4a）から得られたデータを整理・分類し、類似構文と比較・対照させながら、各構文の特徴を浮き彫りにする。
c. （4b）から得られた特徴を踏まえつつ、各構文の先行分析の妥当性を検証していく。

## ４．研究成果

21 年度は、（1）の主語接触関係節の特性について、分離素性継承を援用して説明することを試みた。第一に、Haegeman et al.（2015）の関係節分析を批判的に検討し、その経験的な不備を指摘した。代案として、SCR は、Rizzi（1997）の分離 CP のうち一番下位の FinP

のみを投射し、その主要部 Fin が φ-素性を T に送るが、EPP 素性を保持したまま、Fin の指定部に SCR の主語が外的併合され EPP 素性を削除するという提案を行った。これによって、関係節分析が捉ええることが困難であった SCR の諸特性（主語が対格になることなど）を説明できることを示した。この研究成果は、“ Analysis of Subject Contact Relative Constructions Based on Spilt Feature Inheritance ”（English Linguistics 38, p.33－73）にまとめて公開した。

22 年度は、（2）の because 節主語構文に着目し研究を行った。Because 節主語が外的分布に関して主語性を示すにもかかわらず、数の一致を示さない問題に対して分離素性継承から解決を試みたが、because 節主語が Fin の指定部を占めるという不自然な想定をせざるおえなくなった。そこで、統語論ではラベル付けの曖昧性が許容され、ラベルはインターフェイスで決められるという Mizuguchi（2019）の考えをもとに、上記の不備を解決した。本研究の成果は、“ Ambiguous Labeling and Non-Agreeing Subjects ”（『日本英語英文学』　巻 32 号 79―92）にまとめた。

23 年度は、（3）の指定的疑似分裂文に取り組んだ。この構文のコピュラ後の要素が主語であるにも関わらずコピュラと数の一致をしないことに着目し（What you have bought is fake jewels. （Declerck 1988: 80））、この特性に分離素性継承からの説明を試みた。しかし、これには経験的・理論的不備があった。代案として、ラベル付け理論をもとに、指定的疑似分裂文の分析を行った。具体的には、派生の根底においてコピュラ後の要素と wh 節が主述関係（小節）を形成し、wh 節が話題として TopP の指定部に内的併合し、コピュラ後の要素が焦点として動詞句の指定部に内的併合すると分析した。この分析が、Den Dikken et al （2000）の削除分析の不備を解消し、当構文の重要な特徴に自然な説明を与えることを示した。本研究の成果としては「ラベル付け理論による指定的疑似分裂文の分析」（『日本英語英文学研究』33 号 p.89-117））がある。

本研究は、期間全体を通じて、英語の非規範的主語構文（主語接触関係節構文、because 節主語構文、指定的疑似分裂文）の分析に一貫して取り組んだ。だだし、各構文の特性は、分離素性継承を援用するだけでは説明するのが難しく、当初に示した研究目的をラベル付け理論内で微修正しながら研究を進めることになった。その意味では、本研究は、分離素性継承よりはラベル付け理論に貢献したと考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　3件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>松山哲也 | ４．巻<br>33 |
| ２．論文標題<br>ラベル付け理論による指定的疑似分裂文の分析 | ５．発行年<br>2023年 |
| ３．雑誌名<br>日本英語英文学研究 | ６．最初と最後の頁<br>89-117 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Tetsuya Matsuyama | ４．巻<br>32 |
| ２．論文標題<br>Ambiguous Labeling and Non-Agreeing Subjects | ５．発行年<br>2022年 |
| ３．雑誌名<br>日本英語英文学 | ６．最初と最後の頁<br>79-92 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Tetsuya Matsuyama | ４．巻<br>38 |
| ２．論文標題<br>Analysis of Subject Contact Relative Constructions Based on Split Feature Inheritance | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>English linguistics : Journal of the English Linguistic Society of Japan | ６．最初と最後の頁<br>33-73 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>該当する |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>松山哲也 | ４．巻<br>173 |
| ２．論文標題<br>提示的関係節構文の統語構造について | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>語法と理論との接続をめざして 英語の通時的・共時的広がりから考える１７の論考 | ６．最初と最後の頁<br>253-274頁 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>松山哲也 |
| ２．発表標題<br>Form Copyと英語の自由関係節 |
| ３．学会等名<br>日本英語英文学会第33回年次大会　（2024年3月2日） |
| ４．発表年<br>2024年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>松山哲也 |
| ２．発表標題<br>英語の指定的疑似分裂文の単一節分析 |
| ３．学会等名<br>日本英語英文学会第32回年次大会（オンライン） |
| ４．発表年<br>2023年 |

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|